

ムツシの生態的環境条件 —白山麓の焼畑用地の民俗的考察その2—

橋 礼 吉 石川県立歴史博物館

THE ECOLOGY AND NATURAL CONDITION ABOUT THE LOCATION OF "MUTSUSHI" ON THE STUDY OF FOLKLORES ABOUT LANDS FOR YAKIHATA IN THE MT. HAKUSAN AREA (2)

Reikichi TACHIBANA, *Ishikawa Prefectural Museum of History*

ま え が き

前回の報告(橋,1987)では、「ムツシ」という聞き慣れない焼畑語彙について、その語彙の由来やその意味している内容についてまとめた。ムツシは日常生活における慣用語彙上は、端的には「焼畑適地」または「休憩中の焼畑用地」を指し、決して焼畑そのものを指すのではない。近世以降の文書上では、焼畑用地ばかりでなくムツシや焼畑を管理する出作り小屋の建つ屋敷地や、その周辺の常畑・ヒエ田を含めた山地領域を指す場合が多い。

広大な山林原野のどこでもが、焼畑適地として条件がととのい焼畑が可能なのではない。焼畑を営んだ人は、海拔高度・傾斜・植生・地形・土質等の諸条件を感覚的に総合判断してムツシを選定し、焼畑と取組んできた。

ムツシとは焼畑用地のことである。焼畑では主食であるヒエ・アワ等を栽培する。山の人、とりわけ焼畑民にとって、主食を栽培する用地ムツシの良悪を総合的に読み取る能力・知識は山中で主食を確保し、生活していくため、身につけていなければならぬ基本的生活技術の一つである。

この考察では、ムツシを構成する海拔高度・傾斜をはじめとした諸条件の伝承について、焼畑体験者より民俗的手法で聞き取り、次いで聞き取り内容を検証するため、野外調査でムツシ現地を踏査し、さらに隣接学の視点を導入してまとめることにした。

ムツシの環境条件

焼畑の最大特色は、数年間施肥をせず畑地の地力がなくなるまで収奪的に利用した後、畑地を山林原野に戻すやり方である。これに対し常畑や水田は、同一圃場で永年耕作を続けるやり方なので、その圃場そのものの土地条件より、耕作者の技術差や土壌管理等の人工的施策の差が、とりもなおさず収穫量の差になってあらわれてくる。焼畑は施肥・消毒等の人工的施策はおこなわず、地力維持の数年間だけ畑地を利用するから、ムツシの良悪すなわち地力の差が収穫量の差に連らなってくる。ムツシ選択時に良い条件のムツシを選べば、収穫量(厳密には単位面積当りの収穫量)は多くなる。また悪い条件のムツシを選べば収穫量は少なくなる。

ムツシが自己所有山林の時は、ムツシは土地条件の良悪に関係なく順次循環的に利用せざるを得ない。そして条件の悪いムツシに当たった年は、単位面積当りの収穫量は少ないので、伐採・火入れ面積

を広くして主食の確保に対処しなければならない。反対に条件の良いムツシの年は、伐採・火入れ面積の縮小を計った方が得策となってくる。ムツシが他人所有で請作の時は、地主側も小作人側もムツシ選択の見識眼ともいうべき、ムツシ判定知識を修得していなければ標準的小作料の算出がむつかしくなり、地主側・小作人側共に小作料をめぐる思惑が外れ、対立の因となりかねない。

焼畑民にとってムツシの良悪を判定する総合判断力は、山に生きる者としての必修技術である。そのため山の人々は、多くの要素・指標を総合してムツシを判読してきた。以下ムツシを構成する諸要素別に検証していきたい。

1. 海拔高度

白山麓の各谷筋には、焼畑民が幾世代にもわたり、焼畑を繰り返した結果これ以上の海拔高度の場合、焼畑の生産性が極端に劣るという高度限界が存在する。この高度限界を白峰村河内谷苛原、大道谷五十谷では「ツクリザカイ」、旧新丸村須納谷（現小松市花立町）では、「クワイリザカイ」と言っている。この耕作限界より以高地は苛原では「サンリン」、五十谷では「ダケ」、下田原山では「サンカ」等と言っている。勿論耕作限界線以低地にムツシが存在する。

「作り境」という言葉は、一つの谷筋のこれより奥地すなわち谷筋の源流域は標高が高く、焼畑がむつかしいという耕作限界線である。「作り境」と非常によく似た語彙に「ムツシザカイ」・「ハエザカイ」等のまぎらわしい境界線が伝承されている。例えば大道谷五十谷の尾田敏春家の出作り小屋は、標高785m通称「忠ノ山」にある。この小屋場の最上部尾根筋に小さなブナ林がある。このブナ林は雪崩防止のため、永代にわたり伐採をひかえたため原生林化し、その下部斜面のムツシとの間に、極端な植生上の相違があらわれる。この植生上の境界を「ハエザカイ」・「ムツシザカイ」とよぶのである。補足すれば「忠ノ山」のハエザカイは、とりもなおさず忠ノ山のツクリザカイである。しかし忠ノ山を含めた五十谷筋の耕作限界線は、遙か源流域の小石小屋場（標高940m）、清八小屋場（標高960m）付近に存在する。したがって「ハエザカイ」・「ムツシザカイ」とは、各々の出作りの焼畑用地（ムツシ）の最上部に存在し、その谷筋の「作り境」は、谷筋の最奥・極高の出作りの「ハエザカイ」・「ムツシザカイ」がこれに該当するわけである。

伝承者からの教示では、作り境以高地が焼畑不適地となる理由は三つあるという。第一は、根雪期間が長くそのため稗・粟の生長期間が短くなること。第二は寒冷なので早生種で対応するが、早生種は相対的に収穫量が少ない上に、冷温なのでさらに収穫量が悪くなること。第三は、寒冷な上に根雪期間が長いので、落葉が腐植せずクロ土が出来にくくなることである。

白峰村では、日当りの良い山地を「ヒナタ（日向）」、日当りの悪い山地を「オンジ（陰地）」とよび、作り境付近で海拔高度の高い場所での出作り・焼畑はヒナタでなければならないとしている。

千葉徳爾氏は、白峰村の山林原野中の小地名を、地形図と照合しながら詳細に調査し、それを2万5千分の1地形図に表現した（千葉,1975）。この報告書の「白峰村における各谷系出作地名高度」と題する一覧は、出作り盛行期の各谷筋の極高出作りをまとめたもので、これはとりもなおさず焼畑の高



写真1 白峰村小赤谷勘左衛門山のムツシザカイ
焼畑利用地と不利用地の植生の差が歴然としている。

度限界に近いもので貴重資料である。従来、焼畑の高度限界は、加藤助参氏による明治43年陸地測量部発行の5万分の1地形図判読から1100mとされていたが（加藤,1935）、千葉氏の調査資料では1100mを100m上回る1200mまで、焼畑残像地名が存在することが判った。1000m以上の焼畑地名に関して、今回の調査で新たに確認したものを加えてまとめたものが表1である。とりわけ極高の出作り地は、大杉谷筋の1350mであることを、昭和59年秋まで河内谷苛原・与次の山で出作りを続けられた長坂吉之助氏より教示を受けた。

従来は、大杉谷筋の極高出作りは北俣・与八郎山1100mとなっていたが、長坂氏より極高出作りは大杉谷大滝の下流右岸の松与門小屋場1350mで、鬣をゆうた松与門が季節出作りのため苛原経由で白峰本村とを行き来していたという。この松与門小屋場1350mと、長坂家・与次の山760mの高度差なかなづく気候差を聞き取り資料で比較してみよう。この場合、松与門小屋場1350mが大杉谷筋の作り境である。

与次の山は、積雪初日で7~10日間、積雪終日で20~30日位で、松与門小屋場より根雪期間が短いという。与次の山・松与門小屋場両者の高度差は590m、約600mである。白山麓の実測気温通減資料はないが、金沢の気温通減率（久保次郎,1970）で、両者の約600m差の気温度を算出すると1月は3.42度、3月は3.68度である（表2参照）。すなわち白山麓の約600mの高度差では、約3~4度の気温差であったと推察する。つまり二つの小屋場の高度差は約600m、気温差3~4度が根雪期間27~35日すなわち1ヶ月の差となっていると推察する。白山麓の高度別根雪期間については表3の「白山における各高度における推定消雪日」がある（久保次郎1970）。聞き取り調査による松与門小屋場と与次の山の消雪日27~35日の差は、表3記載の高度500mと1000mの消雪日の差「30日±5」とほぼ一致している（表3参照）。伝承者は共通して、作り境付近は春先気温が上昇し暖かくなっても、降雪量が多く雪が地面の上に長期間消え残るから、焼畑作業をやるうにも残雪が地面を覆うためできないとし、作り境を決定づける気候要素は「積雪期間」の長短をあげている。

表1 白峰村における1,000m以上高地の出作り地名

谷系名称	出作り地名	海拔高度	斜面方向
大杉谷	松与門山	1,350 ^m	SW
*湯谷	庄五郎山	1,200	S
*柳谷	庄兵衛山	1,200	S
牛首川河内谷	美濃山	1,170	S
*大杉谷北俣	与八郎山	1,100	S
大杉谷北俣	小新右衛門山	1,050	SW
明谷	市兵衛山	1,050	W
大杉谷北俣	清八山	1,020	SW
大道谷細谷	孫左衛門山	1,000	W
大道谷大田谷	三太山	1,000	S

*は千葉徳爾1975の資料を一部修正したもの

表3 白山における高度別推定消雪日（久保次郎1970による）

高度	推定消雪日
2,500 ^m	6月20日±5日
2,000	6月14日±5日
1,500	5月26日±5日
1,000	5月15日±5日
500	4月25日±5日

表2 金沢の気温通減率（久保次郎1970による）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
通減立	0.57	0.56	0.53	0.54	0.54	0.53	0.52	0.53	0.51	0.50	0.53	0.56

白峰村大道谷堂の森在住の尾田清正氏は、昭和59年まで五十谷・伍左山へ出作りをされていた。尾田氏からの教示では、五十谷の極高出作りは清八小屋場960m、対するに極低出作りは仙右門山で640m、両者の高度差は320m、約300mである。両者は積雪初日で7~10日間、積雪終日では15~20日間の相違があるとし、春先、冷温が続いた昭和63年の積雪終日では30日間の開きがあったとしている。大杉谷と大道谷の作り境付近の気象条件を根雪期間に焦点をあて比較したが、その影響で作り境付近の焼畑経営では営農期間いわゆる農作物の生育期間が限定されるから、早生種を選んで対応しなければなかった。大杉谷の極高出作り松与門小屋場の作付品種は限定され、ヒエはゴクハヤビエ、アワではアカアワ・クロモチ、マメはトチノコ、アズキはウスグロアズキ・シロアズキ等の早生種であった。松与門小屋場より約600m低い与次の山は中生種がおもで与次の山・松与門小屋場での焼畑作物品種名一覧は表4で示した。「ジゲ」という本村集落周辺では概して晩生種、出作り先では中生種中心、作り境付近では早生種であった。

表4 白峰村大杉谷筋の与次の山・与八郎小屋場の作物品種名

出作り地 耕作者	ヒ エ		ア ワ		マ メ		アズキ	
	焼畑	常畑	ウルアワ	モチアワ	焼畑	常畑	焼畑	常畑
大杉谷・与次の山 長坂吉之助 標高 760m	ナカテビエ サワビエ	コウボウビエ	シロアワ コナボコリ	ムコダマシ ネコデ	シロマメ	アオマメ クロマメ チヤマメ センコウジ ゴカイサンサン	チエウグロ シロアズキ	チュウナゴン
大杉谷 与八郎小屋場 標高 1,350m	ハヤビエ ゴクハヤビエ		アカアワ	クロモチ	トチノコマメ		シロアズキ ウスグロアズキ	

※ 白峰村の出作りでは、アワを常畑で栽培する慣行はなかった。

1000m以高地の出作り（千葉徳爾氏調査のものを含め）の山地傾斜の向きは、湯谷・庄五郎山、牛首川河内谷・美濃山等が南向き、大杉谷・松与門小屋場、北俣谷・与八郎山等が南西向き、細谷・孫左衛山、明谷・市兵衛山等が西向きで、大局的には南向き、西向きが優勢である（表1参照）。

南向き斜面は、単に日照時間が長いだけでなく、消雪にも強く影響し根雪期間が短かく、出作り地としての居住性やムツシ条件としても優れていた。西向き斜面は、積雪期の風上斜面となるのに対し東側は風下斜面の吹きだまりとなるため、積雪量は西側が東側より少々少ない。加えて、気温が上昇した午後の時間帯に陽ざしがさすから、幾分早く雪が融け根雪期間が短い。すなわち白山麓の多雪山地では、消雪に関連して南西斜面が有利で、対するに北東斜面が不利なのである。この原理を裏付けるものとして、白山麓の二つのスキー場の事例がある。白峰村白峰スキー場は南西斜面、尾口村一里野スキー場は北北東斜面に位置している。両者を昭和63年春の営業停止日とりもなおさず積雪滑降可能期間で比較すると、白峰は3月22日、一里野は4月3日に営業を停止、12日間のひらきがある。白峰村のヒナタ・オンジは、一般的な斜面の向きで区別するわけではなく、複雑な使い方をしている。例えば白峰村赤谷川谷筋では、左岸をヒナタ、右岸をオンジとしている。この折のヒナタは大局的には東向き斜面で、南向き斜面ではない。一方オンジの右岸にも出作りは散在し、その折は西向き斜面でも南向き、いわゆる「オンジヒナタ」を選んでいる。

要約すれば白峰村における焼畑高度限界・作り境は、従来は1100mとされていた。千葉氏や今回の調査では、作り境は柳谷筋・湯谷筋では1200m、大杉谷筋では1300mまでさかのぼって存在した事例を確認した。白山麓の焼畑作り境を決定づける一番の要素は、焼畑を試みようとしても残雪があつて一連の作業ができないことである。主食のヒエを栽培する焼畑「ヒエナギ」の火入れは、5月中・下旬

である。このヒエナギの伐採・乾燥作業は、白峰村では火入れ当年には残雪が多くあって障害となるため、前年に終了させておくことを原則としている。この事実を「ナギ刈りは、雪わらじはいても前年の年にすませ。」という俚言であらわしている。

豪雪山村の焼畑用地ムツシには、残雪が多分に影響することが判明した。作り境付近のムツシは、消雪条件の良い南・南西・西側斜面を有効に活用し、栽培する雑穀もヒエ・アワ・マメ・アズキの各々の早生種を選択して高度を克服していた実態が判ってきた。

2. 傾 斜

白山麓には、焼畑やムツシを含め山地地形を表現するのに「ハナバス」・「ハナコキ」等顔の鼻に因んだ語彙、さらに「マブ境」・「メブ境」等顔の目に因んだ語彙が目立っている。すなわち地形語彙に、人間の顔の目鼻に関係するものが多い。「ハナバス」とは、鼻の最高部の最先端部分を指し、「鼻っぱし」がつまったものかも知れない。鼻の先に因んで、岩壁や岩棚の上部を指すが、「バス」と省略してムツシに露出した巨岩を指す。さらに転じて非常な急傾斜地で歩行困難な斜面を指す。「ハナコキ」とは、人間の歩行は可能であるが立った状態では急斜面のため、「鼻がつかえる」程度であるとの形容詞である。ムツシの傾斜度を表現するのに、この外、「マメコロバシ」と言って、マメ（大豆）が斜面を回転しながら落下する程度の急斜面もある。また、急で険しい様子は、一般的には「サガシイ」という語彙で表現している。

ハナバスは、ムツシには不適當である。しかしハナコキ、マメコロバシ、サガシイと形容するムツシの傾斜は、不利な条件には違いないが不適条件までは至らない。

「マブ」と「メブ」は、日常会話ではあまり使わないが、ムツシ文書に多く使用する。マブ・メブは、漢字で表現すれば「目庇」か「目分」かの何れかと推察する。これは顔の部分名で目の上の額と、頭の境部分で髪の毛の生え際を指す語彙である。このようにマブ・メブは本来、顔の部分名であるが、転じて分水嶺境界がしっかりと判別しにくい尾根地形で、最高部より少し下った場所で、傾斜の遷変地を「マブ」・「メブ」という。尾根が、ムツシ境となっている場合、鋭角的にとがった尾根であれば地境は明確である。ドーム状の尾根であれば、地境は明確にならない。このような尾根の時は、マブ・メブを境界とする慣行のようである。ムツシ文書で、「マブ境」・「メブ境」と記すのは、鋭角的にとがっていない尾根筋の時のムツシ境決定の慣行用語である。このマブ・メブは、ムツシの良悪に直接関与するものでないが、近世以降のムツシ文書中に使用例が多いので、この際ふれておく。

伊藤常次郎氏が、小松市小原地内杖坂で、昭和52年焼畑を復元した際、焼畑の最大斜度は51度であった。54年の焼畑では、畑地全体が急な斜面で殆ど40度位の傾斜地で、最大斜度は58度であった。最大斜度が58度であっても、終始58度の傾斜が連続して畑地を形成しているわけではなく、部分的なものである。ムツシの傾斜度については、「マメコロバシ」・「ハナコキ」と急傾斜を形容した場所であっても、また部分的に40度・50度の急傾斜であっても、歩行が可能であれば、焼畑にしていたわけである。

傾斜は緩いほど、畑地として有利なことは言うまでもない。急傾斜が影響する不利は、幾つかある。焼畑は火入れ前、「ヤキシロツクリ」で燃料素としての木を燃えやすい長さに伐り、横水平状に山盛りして並べる作業をする。この際、40度・50度であるとヤキシロの木は急なので斜面をずり落ちて並べられない。そこで雑木を切り支え木を作り、地面に突き差してヤキシロを支えねばならず、急傾斜地ではより多くの手間・暇をかけてヤキシロを手当てせねばならなかった。

焼畑地は、農作物だけが生える山林原野中の一種の裸地である。そのため大雨時や融雪期には、地



写真2 「ハナコキ」のムツシ
左上女性の足のまげ方に注意、急傾斜のムツシ、小松市小原町杖坂の焼畑。



写真3 急傾斜地の支え木
ヤキシロの木を支えるために、急傾斜地では地面に木を突き差す。

表水が原因で極く小規模な地崩れが起こる時がある。下田原谷筋で現在も出作りを続けられる山口清太郎氏の教示ではナギハタ中の小崩壊地を「ダシ」、小崩壊地の最上部はどんぶり鉢・椀底状となるため「ハチ」とよんでいる。ダシ・ハチは、急傾斜であれば必ず発生するというものではないが、緩傾斜であれば発生しないというから、やはり急傾斜は不利といえよう。

焼畑地の化学成分・肥料分は、雨水や融雪水によって溶かされ下方斜面へ流下する。このような現象が影響して、木が切られ農地となったナギハタ斜面は、火入れ3年目のフルバタになると畑地上部は地力がやせてくるのが原則である。愛宕富士氏によれば、ナギハタの上部がやせてくる程度は、傾斜が急なほど激しいとしており、急傾斜のナギハタは畑地上部の地力減退度で、目に見えない部分で不利であった。

3. 植 生

白峰村赤谷筋の出作り群では、「ムツシにはシノギが生え、焼畑未利用地（サンカ）にはタイボクが生えている。」としている。白峰村大道谷五十谷筋では、「ムツシにネズレが生え、焼畑未利用地（ダケ）には、タチキが生えている。」と伝承している。

「シノギ」とは、雪が5・6mも積った積雪期、すっぱりと木の全容が雪に埋まってしまう樹高の低い木々の総称である。「ネズレ」とは、図1や写真4のように、幹が垂直状に生長することなく、多量積雪の影響もあって、幹が根元より傾斜面に這うように生長し、頭をもたげのように繁茂した木々の総称である。シノギ、ネズレは、言葉は違っているがその対象とする木は同じで、雪の圧力で根元が曲がった低木である。具体的には、「マルバオバル」とも「サワオバル」・「ムツシオバル」、さらに省略して「オバル」とも言っているミヤマカワラハンノキ、ウツギ（タニウツギ）・リョウボ（リョウブ）等が該当する。そしてこれらが群落を形成する時は「シノギワラ」・「ネズレワラ」とよび、焼畑用地として最適と位置づけしている。

焼畑未利用地の「タイボク」とは、いわゆる樹高の高い大木である。したがって、積雪期にはその

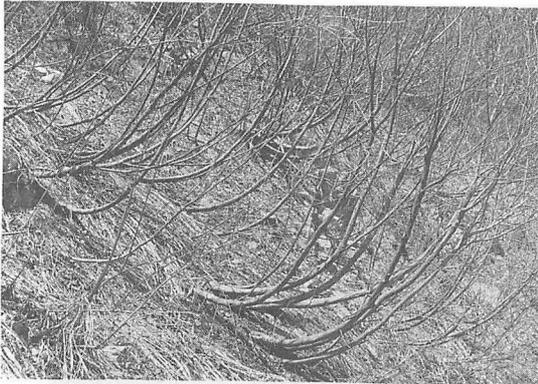


写真4 ネゾレワラのオバル群落
オバル（ミヤマカワラハシノキ）の自生地は、ムツシでも肥えた場所として判定する。



写真5 タチキワラのナラ
ナラ（ミズナラ）の自生地はムツシでも、痩せた場所として判定する。

全容が雪に埋まることはない。「タチキ」とは、普通の立木状樹木である。これらの群落は、「タイボクワラ」「タチキワラ」と言っている。具体的には、寒冷な高い場所にはブナ・ナラ（ミズナラ）が、地力が劣る場所にはクリ・ホウソナラ（コナラ）が生えるとして、共に焼畑には不向きと位置付けしている。実際上は、ムツシとして低木のネゾレワラばかりでなく、立木状のタチキワラも利用する。その折、タチキに関して「ヤコギが生える場所は、地面が肥えている。」と体験者は伝えている。「ヤコギ」とは、材質が柔らかい木で具体的にはキワダ・トチ・コクルビ（サワグルミ）・ハンノキオバル（ヤマハンノキ）等で、これらのタチキは肥えた場所の指標木として、タチキワラ

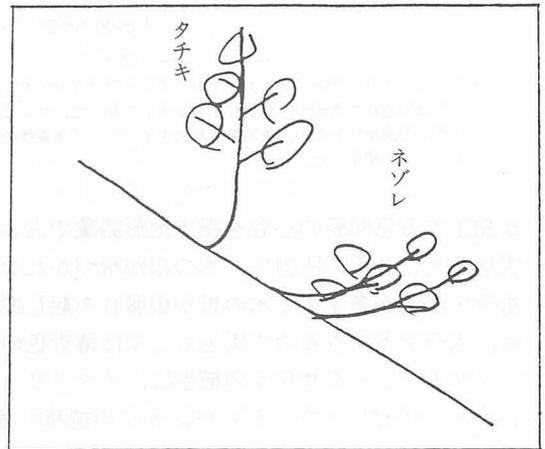
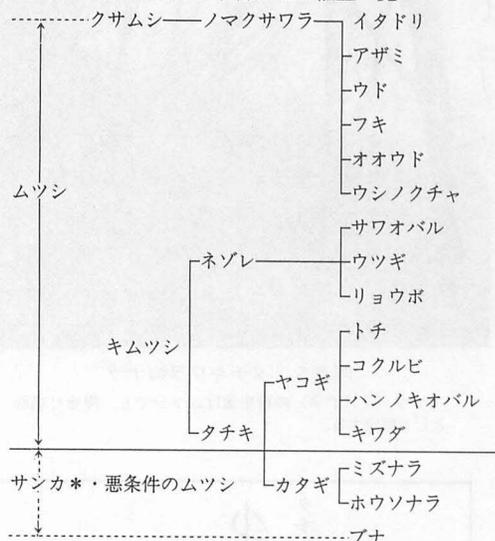


図1 タチキとネゾレ

を判読する基準としていた。対するに、材質の硬い木を「カタギ」と言い、カタギは痩せた場所の指標木とし、特に「ナラワラのテンテコ地面」、「ネソワラのテンテコ」と言って、ムツシとしては利用しない（表5参照）。「テンテコ地面」とは、土が硬くて鋤もたたない様を形容した語彙である。「ナラワラ」はこの場合、ミズナラ・コナラを総称している。「ネソワラ」のネソは、マルバマンサクを指し、合掌屋根の小屋組の結束に使う灌木として広く知られている。このことに関連して旧新丸村小原では、「ムツシ木はボブラ木」と言い、ボブラ木の生える場所を良いムツシとしている。俚言の内容は、「ムツシに生えるハンノキ（ヤマハンノキ）・クルビ（サワグルミ）・キワダ等をボブラ木と総称し、これらは炭に焼いても薪にしても、材質が柔らかく良いものが出来ない。この様はボブラ（なんきん）の実が、中空になって中身がつかまっていないのに似ている。」との意味である。

ムツシに利用される樹林相は、「ネゾレ」・「シノギ」の呼称でよばれる低木樹林地や、「ヤコギ」の生える高木樹林地である。ところが、樹木がまったく生えず草しか生えない場所もムツシとして利用し、旧新丸村杖（現小松市）では「クサムツシ」とよぶことは前稿で紹介した（橘,1987）。クサムツシに相当する植生地を、白峰村河内谷苛原では「クサワラ」、白峰村大道谷五十谷では「ノマクサワラ」と言い、その対語は「キワラ」である。因みに、「ノマクサワラ」の「ノマ」とは、雪崩

表5 焼畑用地・不利用地の植生一覧



*サンカ・キリ・サンリン・ダケヤマ・ダケ・アラヤマ・サンバクは同意語であるが、代表に「サンカ」を使った。サンカは焼畑不適地であるが、使用する時もあるので、「悪条件のムツシ」と補足した。



写真6 春先のノマクサワラ

雪崩が消え、芽を出しはじめたノマ、上部から雪崩で土が下部へ供給されることもあり、肥えたムツシでもある。

が発生する急傾斜の小谷を指す地形語彙である。伝承者は、木が生えず草地となる理由として、毎年雪崩が起こりその圧力で、木の根が根づかれないことをあげている。さらに、もう一つの理由として水分・湿気が多すぎて木の根が根腐れを起して根づかれないとしている。だから、クサワラの土質は、水分が多すぎるので灰色もしくは薄青色の粘土質になっているという。

クサムツシ・クサワラの植生は、イタドリ・アザミ・フキ・ウド・オオウド（シシウド）・ウシノクチャ（ザゼンソウ・ミズバショウの総称）等で、これらの草を総称して「ノマクサ」と言っている。このような植生の上部斜面は、ムツシとしては土質も柔らかく地力が肥えているとし、特にウドが生える草地を最上肥沃地として位置づけている。このように、草だけの植生のムツシは肥えてはいるが、焼畑の火入れ作業時には燃料素としての草本が少なく、「切り込む」と言って他所より燃料素を運ばねばならず、手数が多くかかった。ノマクサの群生地が、作り境を越えた場所にある時は、「ナバタ」と言い、春先山菜を大量に採取する格好の場として利用している。

ムツシの植生生態に関する伝承では、ムツシに生える優生樹は多雪地帯特有の根元で屈曲した低木群落である。低木群落は、マルバオバル・リョウボ・ババウツギであり、和名に代えればミヤマカワラハンノキ・リョウブ・タニウツギである。これらの低木群落は、焼畑のため伐採し一時的に植生が消滅した場所に、好んで繁殖する代償植生とみなされる。補足すれば、焼畑民が原生林野に最初に斧を入れた時点では、マルバオバル・ババウツギ等が優生であったのではなく、焼畑放棄地にマルバオバル・ババウツギが最初に生えて、優生樹となったものである。したがって、最初に焼畑民が原生林野に斧を入れた、その以前の自然植生はどのようであったのだろうか。

白山麓は従来、標高500m位までが下部夏緑樹林帯、500～1500mの範囲をブナ帯としてきた。最近の実態調査では、標高300m付近にもブナ林が現存することから、ブナ帯は300m以高地を範囲とするようになった（里見信生等1970）。手取川本流筋のブナ林では、鳥越村仏師ヶ野集落の上部（標高約350m）、尾口村旧鶺ヶ谷集落の上部（標高約500m）に現存している。白山麓で最初の焼畑民が、火

入れのため伐採した時は、ブナ帯の優生林であるブナ・トチ・ナラ（ミズナラ）・コクルビ（サワクルミ）等に斧を入れたと推察する。

焼畑の作り境は、谷筋によって異なっていることは前項で触れた。白峰村大道谷五十谷では、時として耕作限界線を越えた領域、すなわちダケにまで進出して焼畑を経営しなければならず、その時はタチキの樹木観察で地力を判定する必要性に迫られる。この時の基準は、ブナよりナラ（ミズナラ）自生地が痩せているとし、さらに、ナラよりハウソナラ（コナラ）が痩せ地であると判定している。その判定理由として、尾田清正氏は三つの事項をあげている。一つは、肥沃地を好むウドは、ブナ林には散見できるがナラ林には全然見当たらず、ブナ林の方が肥えているとしている。二つには、ナラ・ハウソナラいずれもが、硬くて痩せた土壌を好む特性をもって樹木としている。三つには、ナラはブナより落葉の時期が非常に遅く、葉が腐りにくいことをあげている。ブナは春先、どの樹木よりも一番先に萌黄色の新葉をつけることとも関係し、秋にはやはり他の樹木より比較的早く落葉するので、地表で腐植する時期も幾分長いという。一番遅く落葉するのはナラ類・クリで、ブナより一週間二週間も遅く、クリは風当りの弱い斜面にいたっては、初雪が降っても葉をつけているという。このような落葉の時期差が腐植層の形成に影響、土壌の性質にも関係していると、尾田清正氏は指摘している（図2参照）。この事実に関連して、白峰村ではクリワラは極端に痩せていると位置づけし、クリワラの林床には山菜は全然生えないとして、山菜採取者は足を向けない場所となっている。なお、クリワラは木の実を採取するため育てたものだから、ムツシとして伐採されることはなかった。

白峰村下田原の兵井庭一氏（故人）によれば、ムツシで最も肥えているのはオバル（マルバオバル）ワラ、次いでウツギ（ババウツギ）ワラで、ムツシで痩せているのは「ハシケ」の場所で、ハシケとは秋の紅葉期に木の葉が黄色・もみじ色に変色する木の総称である。

伝承者は、マルバオバル（ミヤマカワラハンノキ）・ババウツギ（タニウツギ）は「草と木のアイノコだから葉が腐りやすい。」としている。伝承の意味する内容は、マルバオバル・ババウツギは草にも木にも属さず、例えてみれば、動物・鳥にも属さない、コウモリのような木だとしている。そしてその最大理由は、葉が証拠であるとする。マルバオバル・ババウツギの葉はブナ・ナラ類の葉のように小型ではなく大型であり、また葉肉は草ほどでもないが柔らかいのを第一の特長としている。第二の特長は、山の樹木は紅葉期には緑色から完全にもみじ色に変色し、葉肉には水分がなくなりかさがさするが、マルバオバル・ババウツギは葉の緑色が少し黄色味をおび、葉肉も水々しく柔らかいまままで落葉する。したがって兵井庭一氏は、マルバオバル・ババウツギの落葉は腐食しやすく、毎年繰り返すことによって腐植層が厚くなって肥えた土ができるのだと指摘している。さらに伝承者は、「ハシケ」と総称される、紅葉期に真紅や黄色に変色する樹木の葉は、マルバオバル・ババウツギに対して葉の大きさは3分の1位で、水分に乏しくかかささしており、地表面の落葉は腐植はするが腐植層はマルバオバルと比較しては、肥えた土にならないと指摘している。

白峰村ではオバルについて、ネズレとタチキに二分して区別している。ネズレのものは、「マルバオバル」とも「サワオバル」とも言い、和名はミヤマカワラハンノキである。タチキのものは、「ハンノキオバル」と言い、和名はヤマハンノキである。そしてマルバオバルの群生地を、よく肥えた最上位のムツシとして評価している。ハンノキの根には、放射菌と思われる微生物が付着し、それが空中窒素の固定作用を行なってハンノキに与え、ハンノキの成長と山地土壌に良い影響を及ぼしているとされている。つまりハンノキの根はレンゲソウが水田に好影響をもたらしているのと同じ役目を、焼畑休閑地のムツシに与えているのである。このことに関連して、兵井庭一氏によると下田原川筋の出作りの中には、焼畑休閑地に杉を植林する際に杉の苗木の間にミヤマカワラハンノキを植え、杉の苗木の成長を促す慣行があったという。

「クサムツシ」・「ノマクサワラ」とよばれる草地在、雪崩の滑落と水分過多により木が育たないこと、さらに草地は総じて樹林地より肥えているという伝承内容について考えてみよう。大政正隆氏は「土壌中の水分と植生」に関して、「わが国の森林土壌に表層グライというのがある。これは地表近い重粘な土層に水が停滞してグライ化したものである。グライ化とは、停滞水によって還元された灰色から青系統の色を帯びた土層ができる現象である。グライ化をうけた土は、地表近くまで年を通して水びたしの状態にあるので普通は草地となる。」と説明している（大政正隆1977）。水分過多な土壌は水分のせいばかりでなく、土壌中に空気が入らないので木の根が成長せず、水分の幾分少ない表層に、根の浅い草が生えるのである。

積雪期、急傾斜の谷では雪崩や、雪崩までもいたらないにしても雪の滑落が、各地で度々発生する。雪崩の発生場所は、地形的にはほぼ固定しており、その通過路は雪滑落の圧力・重力により地表にあるものは流され、そのため樹林は成育できない。白山麓では、雪崩の影響で草地となった植生は、植物学的に「高茎草原ヤマモギークロバナヒキオコシ群落」とよんでいる植物帯である。この植物帯を、白峰村では「雪崩のでる谷の草原」を意味する「ノマクサワラ」という通称でよんでいる。残雪期に、ノマに発生した雪崩終着地（デブリ）を観察すると、これが雪かと疑うほどの様相を呈している。補足すれば、デブリの表面は枯草・落葉・小枝・土砂で覆われ、雪の白さはまったくなく、白峰村では雪崩が運んだ諸々のものを「ナダレクソ」と言っている。すなわち雪崩は、雪だけが落ちるのではなく、表土や表土上の枯草・落葉を一緒にして斜面下方へ運搬するのである。すなわち「ノマクサワラ」という高茎草原は、有機物や土・石を雪崩により、毎年毎年斜面上方より供給される。この雪崩による運搬作用は、河川下流三角洲が、流れにより上流域より肥沃な土砂を運搬堆積しているのに似た役割を果たしているため、ノマの下方は三角洲同様肥沃なのである。「ノマクサ」と総称する草の実体は、イタドリ・アザミ・フキ・ウド・オオウド等のいわゆる草で秋には枯草となる。この枯草は、かさかさした紅葉の落葉よりは、より腐植しやすいため腐葉土層形成の面でも恵まれている。一方、多湿地の土壌について大政正隆氏は、「グライ化土壌の草地は、形態的にまことに肥沃に見える。また事実肥沃なのである。」と表現し、その肥沃度に太鼓番を押している（大政正隆1978）。

4. 地 形

白峰村大道谷刈安の山下五郎氏（故人）は、「ムツシは人間の体に例えれば、へそより下で山の下半分にある。」と言っている。斜面の垂直方向は最高部は尾根筋、最低部は水の流れる谷筋で、ムツシは谷筋寄りの斜面下半部に位置するわけである。

斜面上半部をムツシ不適地とする理由について伝承者は、水分は斜面上半部より下半部に流れ、そのため肥料分は上半部より下半部に流されて痩せていることを第一にあげている（図3参照）。この原則は、山地斜面という大地形ばかりでなく、一つの焼畑でも同じで、火入れ後2・3年目のフルバタになるとこの傾向が顕著になるといえる。第二の理由として、上半部は乾燥気味のため土質は固目で、落葉も腐植しにくい状態のため痩せているという。このような山地上半部の尾根筋や風通過地で、水分・湿気が少なく、かちんかちんの山地地相を、白峰村河内谷苛原では「カセヤマ」と言い、焼畑不適地としている。

大地形的な山地斜面が、図4のように斜面途中に平坦地がある時は、旧新丸村小原では「足の切れた山」という。旧新丸村小原では、平坦地上部を「ウフムツシ」、下部を「シタムツシ」といって区別する。ウフムツシ・シタムツシ共に、各々下部斜面が肥え、上部斜面は痩せていると位置付けている。途中平坦地は「ダックリ」と言っている。同じように白峰村では、その規模が大きい時は「バ

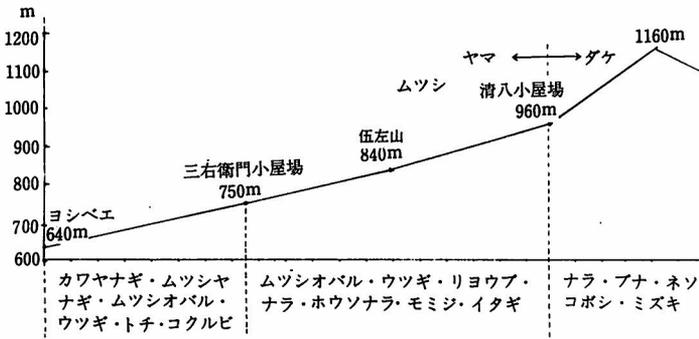


図2 白峰村大道谷五十谷のムツシ・ダケの優生樹の分布 (尾田清正・尾田好雄氏の教示により作図した)

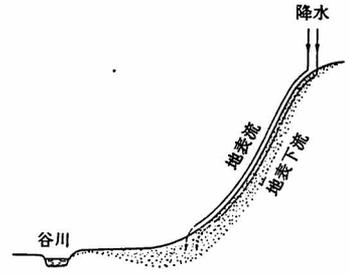
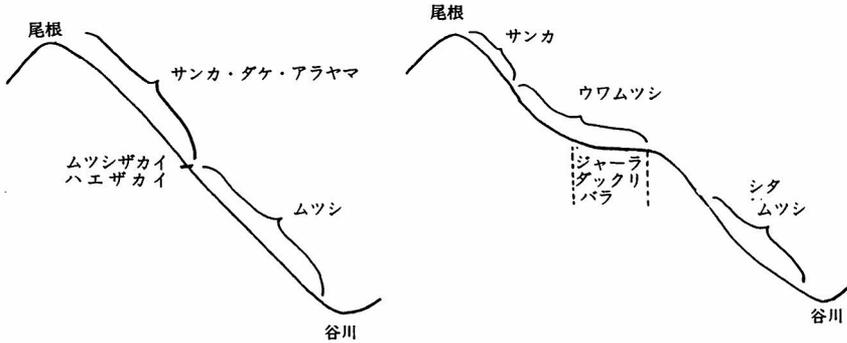


図3 斜面における水の分布 (大改正隆による)



イ. 連続した斜面のムツシ ムツシザカイが尾根筋近くにある場合もある。 ロ. 途中で平坦地のある斜面のムツシ

図4 斜面上の焼畑用地と不利用地

ラ」，小規模な時は「ジャラ」と言い，出作り小屋の屋敷地や肥沃なムツシとして選定されてきた。白峰村には，「作りは一にコウロウバラ（大道谷太田谷），二にコイトバラ（百合谷），三にナカバラ（大道谷五十谷）」と言い，斜面途中の小平坦地「バラ」は，焼畑をした場合の多収穫を期待できる場所のベスト3のすべてを占めている。つまり山間部平坦地は，肥沃度の高いムツシとして注目されてきたのである。

ムツシ斜面の水平方向は，小尾根と小谷を組合わせた波状となる。言い換えれば，ムツシの水平方向は，微妙な凸斜面と凹斜面の構成である。白峰村では，主脈的な尾根は「オオオ（大尾）」，支脈的な尾根を「オボネ（尾骨）」，末端的な尾根を「サシオ」と三段階に分けている。尾根に対し谷に関しては，水が大きな溪流となっている大動脈的な谷川を「タニヤ」，支脈的な谷を「タニ」，さらに末端的な小谷で平時水の流れがなく，凹地が急斜面で連続するものを「ノマ」と言い，地形規模に応じた呼称をつけている。

尾根は一種の凸地，谷は一種の凹地である。ムツシ中にサシオすなわち凸地，ノマすなわち凹地が多くあれば，水平方向に出入れの多い波状地となる。このような状態を「ムツシのナミが悪い。」と言いノマ・サシオが少ない時は「ムツシのナミが良い。」と言う。ムツシのナミが悪い時は，伐採・火入れ・播種等と続く一連の農作業は，能率が悪かった。ムツシのナミについての肥沃度は，「ノマは肥えている。サシオは痩せている。」補足すれば，ムツシの凹地は収穫は良いが，凸地は収穫が悪

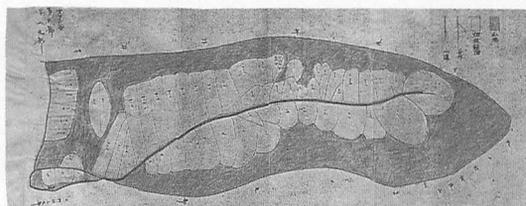


写真7 小松市小原町オワン谷のムツシ絵図
左下より右上にかけて谷川、その両側、山の下半部に
ムツシ、上半部にアラヤマがひろがっている。

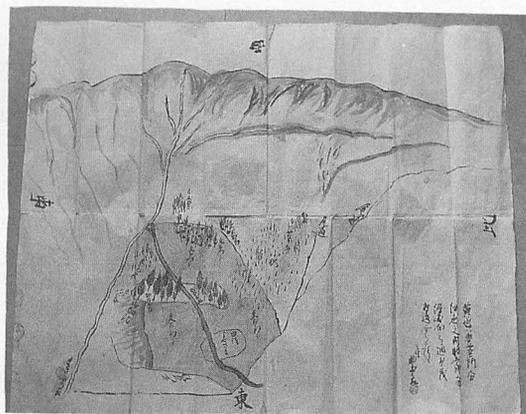


写真8 嶋村(白峰村桑島)のムツシ絵図
(白山麓民俗資料館蔵)
ムツシは山地斜面の下半部に描かれている。
上部はサンカ(フカヤマ・アラヤマ)で焼畑不利用地である。

いと、伝承者は判定している。

「ムツシは下半部に位置する。」との伝承が焼畑地帯で普通化しているのであれば、土地台帳の絵図面で、ムツシは谷筋に沿って記載されている筈である。この視点で、小松市役所蔵の「旧能美郡 新丸村字小原見取図・山林の部」を閲覧検討した。山林見取図の地目は二つで、一つは「畑・薙畑」他の一つは「山地」である。地目の「畑」は常畑、「薙畑」は焼畑でいわゆる耕地に利用可能なムツシ、地目の「山地」はムツシ不適地で薪炭用原木供給地として利用し、小原でいう「アラ山」と考えられる。見取図「への部」には、谷川を挟んで両側に畑・薙畑が記載され、畑・薙畑以高地に山地が記載されていた。別な表現をすれば、土地台帳には、斜面下半部にムツシ、上半部にムツシ不適地のアラ山が、はっきり分離して描写しており、伝承が確実に図面化されていたのである。小原出身の伊藤常次郎氏によれば、小原地内の「への部」は大日川支流オワン谷流域の山林原野で、現地のムツシは谷筋に沿って斜面下半部が帯状に谷奥方向にひろがり、そのムツシの垂直方向のひろがりが高差で少なかったせいで「フンドシムツシ」と形容していた。ムツシを含めて、山地斜面のひろがりが高差が多い時は「足が長い」、標高差が少ない時は「足が短い」と言った。したがってフンドシムツシとは、足の短いムツシが横広に長く続く状態を指すのである。

斜面上半部が焼畑不利用地となる原因について、伝承者は水分と肥料分・腐植層不足をあげているが、この問題は森林土壌学分野である。斜面の水は、雨水・融雪水によって供給され、その行方や水分分布は図3で示した。斜面の腐植土は、雨水・融雪水により少しずつ下半部へ運搬される。雨水・融雪水は土ばかりでなく、植物養分を水に溶かして下半部へ運搬するのである。したがって尾根や斜面上半部は、乾燥が強く腐植層も薄く、栄養分の乏しい土壌となり、ムツシ条件は劣悪となり焼畑不利用地なる公算が大きくなる。

ムツシの地力は、凹斜面や凹地が肥沃で、凸斜面や凸地が痩せているとの伝承も、森林土壌学に通じる内容である。山地斜面では、母岩の風化・崩壊・土壌の堆積が行なわれているが、土壌は凹斜面・凸斜面・平衡斜面によりその特色に差があらわれてくる。これをまとめたのが表6(林業実務必携1978)である。表6の内容から、総じて凹地が肥沃であるとする伝承は、妥当であることが判る。表6の意味する論理を、山足の長い平衡斜面にあてはめると、尾根や尾根寄りの上部斜面は凸斜面が優勢であり、対するに流れのある谷底や下部斜面は凹斜面が優勢であるから(図3・4参照)したがってその斜面形状の本質差から発生する土壌の肥沃度にも影響し、その帰結として図3、図4に見るように凹斜面の多い下部斜面が肥えているのである。

「ムツシは人体ではへそより下半分」という伝承は、海拔高度が低く、へその上下が区別できない

表6 斜面の形状と土壌（「林業実務必携」1981より抜書き）

斜面		特 色
名 称	形 状	
凸形斜面 (上昇斜面)		地表水および土砂の流亡が最も大きい。このため土層は薄く、乾燥し、塩基など養分に乏しい。斜面上部は残積土（母岩から風化してきた土）、下部は土壌がきわめて薄い。
平衡斜面		斜面の上部は土層が薄く、乾きやすいが、中腹から下部の土層は中庸ないしやや厚く、水湿状態は潤ないし湿に保たれる。一般に葡行土（重力の作用で上からずり落ちた土）が多い。
凹形斜面 (下降斜面)		水分・土砂の最も集まりやすい地形。このため土層は厚く、水分・養分に富む。肥沃な土壌が生成されやすい。一般に崩積土（斜面の上方が崩れ落ちてたまった土）が多い。

足の短い里山には、適合はできない筈となる。補足すれば、理論上では海拔の低い里山の下部は上部から供給される水分・栄養分も少ないから、肥沃度は低いというのが原則となる。これを裏付ける焼畑民の実体験がある。大日川ダム建設で離村した旧新丸村小原の伊藤市平・伊藤常次郎兄弟は、小松市津波倉町地内の山林で、昭和52年夏に焼畑を試みた。この焼畑は、海拔45～50mの里山を、白山麓の焼畑技法で大根収穫をめあてにしたものである。結果は、発芽状況は半分以下、発芽したものは大根葉にも生長せず、1本の収穫もできなかった。そしてこの体験を通して、水没地小原周辺の山地が肥え、里山が痩せている事実を肝に銘じたという。里山の大根焼畑で収穫が皆無であった原因は、山足が短いことに加えて、里山の山相は老年期地形で円味のある凸斜面が多いのも一つであろう。

海拔高度が低く、緩やかな前山的な里山が焼畑には不向きで、海拔高度が高く、奥山的な壮年期地形で険しい山地の下半部が、焼畑には適切であることの問題は、注目しなければならない。従来、焼畑・出作りは、白山麓の山地は「高く、険しい」から常畑・水田ができないこと、すなわち消極的立地論で説明する場合が多かった。しかし実際的には、里山は、土壌管理をする常畑にはむいていても、焼畑にはむかないのである。したがって「白山麓の焼畑・出作りは、険しい壮年期地形で平衡斜面の多い山地にとって、最も利にかなった農耕である。」と、積極的立地論で評価すべきであろう。補足すれば、白山麓の散居村的な出作りは、山足の長い平衡斜面の肥沃な下半部や途中平坦地を、積極的に焼畑に利用した実態のあらわれとする視点である。

5. 土 質

焼畑民はムツシの土質に対し、直感的に良悪・肥沃度を判定してきた。伝承内容を総合すれば、肥えた上位質の「ジョウデン」と、痩せた下位質の「ハクデン」の二つに大別して、おおまかにその肥沃度を把握した。

ジョウデンの表層は、黒色・黒褐色の土「クロ土」が層をなし、踏みこんだ足に感覚的に柔らかくあたるとしている。クロ土の上部を角ばった黒色の小石が一面にひろがっている時があり、この小石を白峰村河内谷では「ゴウロ」、白峰村大道谷では「ジャレイシ」、旧新丸村小原では「マナゴ」といい、ジョウデンでも上位の肥沃地と位置付けしている。この黒色をした小石が、崩れて肥えた土となるのだとしている。

ハクデンの表層は、赤褐色をおびた土「アカ土」がひろがり、水分も少なく、踏みこんだ足に固くあたるとしている。アカ土は、口で味わうと苦味があるので、白峰村河内谷では「ニガ土」とも言う。またハクデンに、キツネノカズラ（ヒカゲノカズラ）やイワナシ（イワナシとアカモノを総称した呼称）が生えると、ハクデンでも下位の非常に痩せた土地と位置付けている。

肥えた上位のジョウデンと、瘦せた下位のハクデンの中間位のムツシとして、旧新丸村小原では「シラハタ」があり、その土は薄い青色・緑色で粘土質であるという。

白峰村赤谷の山口清次氏によれば、ジョウデンの指標草類はアザミ・ウド、ハクデンはトリアシ・メガヤ、中間のムツシはフキ・オガヤであるとしている(表7参照)。

表7 ムツシの等差別呼称とその指標植物

所在地		上位のムツシ			中位のムツシ	下位のムツシ	
		指標植物 ウド・アザミ			フキ・オガヤ	トリアシ・メガヤ	
地名	伝承者	ムツシ名	土壌名	礫石	ムツシ名	ムツシ名	土壌名
白峰村 河内谷	長坂吉之助	ジョウデン	クロツチ	ゴウロ		カセヤマ	アカツチ ニガツチ
白峰村 桑島赤谷	久司久四郎	ジョウデン	クロツチ	クロイシ	チュウジョウデン チヨウハクデン	ハクデン	アカツチ
旧新丸村 小原	伊藤常治郎	ジョウデン	クロツチ アマツチ	マナゴ	シラハタ	ハクデン	アカバンコ ニカツチ

ムツシの土壌は、森林土壌学上は褐色森林土が殆どである。ジョウデンの表層には、クロ土が分布する実態があり、この「クロ土」とは、いわゆるA層とよばれる黒色の腐植層である。この層は、落葉や落枝等が微生物による分解・腐植で作られたもので、土を柔らかくする作用をもち、さらに窒素分を多くさせて肥えさせる役目をする。ジョウデンの中、谷筋の水分の多い場所は湿性褐色森林土、斜面下半部は、適潤性褐色森林土で、土壌中の水分・栄養分の状態も良く、両森林土共に最肥沃地である。

ハクデンの表層には薄いクロ土があり、すぐアカ土(いわゆるB層)があらわれる実態である。多分、ハクデンとは、尾根筋や斜面上半部や凸斜面で乾燥気味の土壌で、適湿性褐色森林土であろう。このハクデンは、ジョウデンより水分・栄養分が相対的に少ない。

従来、各出作りの焼畑年次別作物に違いが見られる時は、その要因を各出作りの作物への要求度に求めてきた。補足すれば、1年目ヒエ、2年目アワはかわらないが、3年目以降の作物は出作りの希求度の差があらわれると考える傾向があった。ところで今回の調査では、年次別作物の違いと、耕作年数(休閑までの年数)

表8 ジョウデン・ハクデンにおける焼畑年次別作物

耕作者	ムツシの等差	焼畑年次別作物					
		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
大尾道 田谷清正 谷家	ジョウデン	ヒエ	アワ	マメ	コナヒエ	アズキか コナアワ	休閑
	ハクデン	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	休閑	休閑
河長内 谷吉之助 苛原家	ジョウデン	ヒエ	アワ	マメ	コナヒエか コナアワ	ソバか エイ	休閑
	ハクデン	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	休閑	休閑

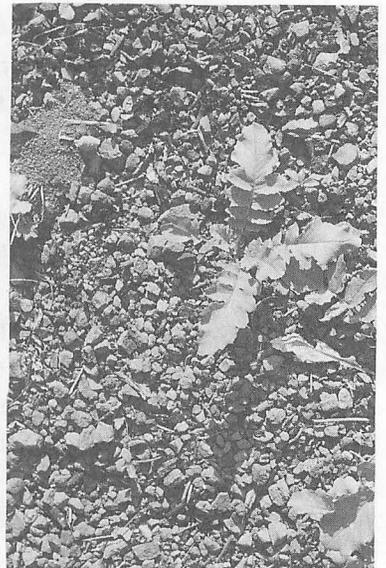


写真9 ジョウデン表層のジャレ石
白峰村の大道谷五十谷のシヨンベン
坂のナナギ(大根栽培焼畑)の角礫。

の差は、ムツシ中の圃場の肥沃度の差に影響されていたことが判明した。ジョウデン・ハクデンに応じた、焼畑の年次別作物は表8で示した。

ジョウデンとハクデンの中間位のシラハタは、その土壌の色が薄い青色・緑色をしている点に注意すれば、これはグライ化土壌である。グライ化土壌は、谷筋や凹地の過湿地にでき、土の中に酸素を含んでいないので木の根が腐植し木が育たず、草だけとなった植生地で肥えているのである。

クロ土に混入する「ゴウロ」・「ジャレイシ」・「マナゴ」等とよぶ角ばった小石は、森林土壌学上「角礫」と命名されているものである。角礫は、斜面上半部の基岩が崩壊し、斜面下半部へ移動してできた崩積土中に含まれるとするが、実際には表層土の上にひろがっている時も多い。角礫が適度に混入すると、土が緻密に接することが少なく、間隙がしやすい。そして土壌中の水・空気の移動が容易になり、焼畑作物・植林樹の根育成にとって有利な条件となるのである。

アラヤマ・ダケ・ダケヤマ・サンカ・キリ等の呼称差が著しい焼畑不利用地は、尾根筋や斜面上半部に位置するという伝承から、この場所の土は乾性褐色森林土であり、雨は降ってもすぐ排水され、水分も栄養分も乏しいのであり、焼畑民が焼畑不適地として忌避しているのは利にかなっている。

6. ツツレワラ・ジャムネワラ

アラヤマ・ダケヤマ・キリ等の焼畑不利用地は、瘦せた土壌、長い根雪期間、低い気温等が農作物成育に影響するのであるが、伝承者はさらに不利な条件として、焼畑に利用しようにも土が露出していない場所がひろがり、どうにもならないとしている。

伝承内容を総合すると、ブナ林やナラ林では、落葉がピッシリと幾重にも積もり、厚い層を作って落葉のじゅうたんを作って、斜面を覆っているのである。その原因として、落ちる葉の分量より、腐る分量が少ないからであるとし、葉の腐りにくい理由として三つをあげている。理由の第一は、落葉のじゅうたんができる場所は、尾根筋や斜面上部の風の強い場所で、このような所は乾燥しやすく水分が少ないので腐りにくい。理由の第二は、尾根筋・斜面上部は海拔高度が高く、冷温なので腐りにくい。理由の第三は、落葉のじゅうたんができる樹林はタイボクワラで、木そのものが高く大きく、だから多量の葉を落し、さらにブナ・ナラ系の落葉はカサカサしている上に、大木は若木より老いているため葉が固く、非常に腐りにくい等である。

腐植の進まない落葉のじゅうたんに関して、白峰村大空の愛宕富士家のムツシの事例で説明する。大空地内の休閑年数の長いヒネムツシの林は、高木のタチキと、林床低木のシバに大別できる。タチキの優生樹はナラ（ミズナラ）・イタギ（イタヤカエデ）で、たまにブナが混ざっている。シバは、ツツジ（ヤマツツジ）・シタマガリ（サイゴクミツバツツジ）フクラシバ（アカミノイヌツゲ）・イワナシ（イワナシ・アカモノを総称）等が代表である。シバの根の特色は、数少ない太い根が垂直状に地中に下ることをせず、数多くの細い根が網目状に水平的に地表に沿ってはびこるのである。このシバの根が、腐植が進まない落葉層を、キルテングした縫糸の役目を果たす。したがって落葉層を地面からはがそうとすると、シバの根がはびこっているため部分的にはめくれず、じゅうたんをまくったような状態となる。白峰村では、腐植の進まない落葉層を「ツツレワラ」と言っている。ツツレとは、破れた古着をポロ切れで、それも幾重にも幾重にも接ぎ張りしたものを指す。腐植の進まない落葉層の状況は、継ぎ張りした古着の様に似ており、シバの根がツツレの縫糸と同じ役目をしていることから、「ツツレワラ」と命名したものである。

白峰村のツツレワラを、旧新丸村小原では「ジャムネワラ」と言っている。ジャムネとは、林床に自生するシバの根を指し、ジャムネが網目状にひりがっている様に因んで命名したものである。シバのジャム根に対し、タチキの根は垂直状にのびるので、根葉のゴボウに似せて「ゴンボ根」と命名し

ている。

白峰村旧赤岩地内，東高山の南西斜面，通称「カンチ（官地）」のツツレワラの実態を以下にまとめた。調査地の海拔高度は1150mで，焼畑不利用地キリとムツシの境界付近にあり，南西向きの緩斜面のブナ林は，イタギ（イタヤカエデ）が少し混入していた。ブナ林の林相は，原生林を感じさせるような大木がなく，焼畑休閑地としての二次林的な様相で，直径30cm位の樹々が多い。ブナの落葉量は，表9で示した。ブナの落葉量は他の樹々と比較すれば多い方に属する。



写真10 白峰村大空のツツレ

半腐植のツツレワラを切りとり，持ち下げても，細根が網目状に走っているので，バラバラにならない。

表9 樹種別年間落葉量
(大政正隆1978による)

樹種	採集所数	平均落葉量 トン/ヘクタール
スギ	51	3.8
ヒノキ	79	1.9
アカマツ	45	2.5
クマリ	1.5	1.9
ケヤキ	7	1.4
コナラ	11	2.3
ブナ	7	2.8
シラカバ	9	1.6

林床の土壌最上層は，落葉・小枝が3・4cmの厚さで堆積し，この下に半腐植の落葉が，ピシリと圧縮された状態で幾重にも重なり，7・8cmの厚さで下層を形成している。上・下層を合わせて約10cm位の厚い層が，じゅうたんを敷きつめたように，土をすっぽりと覆っていた。ツツレワラの標本採取のため，鎌を正形状に切り込むと，低木の細根がツツレワラに密生し，さらに下の土までのび，たやすくはぎ取れなかった。

白峰村大空の愛宕富士氏より，「ツツレワラは，ムツシの中にもできる。」との教示を受けた。すなわちツツレワラは，耕作限界線以高の領域にできるのが普通であるが，ムツシ中にもできるというのである。大空の愛宕氏所有山林，標高720mのムツシを調査した。ムツシは南西斜面，休閑後約50年を経過したヒネムツシで，ナラ（ミズナラ）が多くハンサ（ミズメ）・イタギ（イタヤカエデ）が目立ち，ツツレワラの厚さは標高1150mの赤岩地内のものより薄い，林床にツツレワラを形成していた。

焼畑民のツツレワラに対処する仕方は，一様ではない。白峰村河内谷苛原の長坂家の場合は，ブナツツレは焼畑に利用するが，ナラワラは痩せているとしてナラツツレは避けている。白峰村大空の愛宕富士家のムツシには，ブナツツレはなくナラツツレがある。樹木伐採の折，鎌でナラツツレをはぎとる。この作業を「ツツレのエンギリ」と言い，十分乾燥して後火入れ作業をおこない燃やした。白峰村北俣の永井竹男家の出作り小屋場は，標高1050m，ムツシの半ばがツツレワラとなっていた。ツツレのエンギリ作業はせず，火入れは晴天が続くツツレが良く乾燥した後におこない，ツツレのない場所より2倍位の時間をかけ，ゆっくりとツツレを燃やしながらか火を下げた。事例のように，ツツレワラは絶対的な焼畑不適地としての条件ではなく，除去のための集約的労働力と時間的余裕があれば，ムツシとして利用可能なのである。白山麓のブナ帯は，かつては300m以高地に分布していたと考えられているから，白山麓で焼畑民が，最初に山林に斧を入れた時には，すべての山林でブナ・ミ

ズナラが優生で、林床にはツツレワラがあったと推察する。

白峰村のツツレワラ、旧新丸村のジャムネワラの実態、すなわち落葉が半腐植のまま厚い層を形成する様は、森林土壌学でいうポドソル上層の実態そのものである。この半腐植のままの腐植層は、雨水や融雪水により水に溶けやすいアルカリ性分が溶けて下層にしみこむため、非常に酸性が強く農耕に適しないのである。尾根筋付近の焼畑不適地のツツレワラは、乾性ポドソル化土壌と思われる。しかしムツシ中のタチキワラに発生するツツレワラは、森林土壌学上の分類名、発生する原因等については専門外の内容でもあり言及できない。とにかく耕作限界線ツクリザカイ付近に居住する出作りは、焼畑の最初の段階すなわち伐採・火入れ作業の際、常にツツレワラに対し鎌で切れ目を入れて起したり、そのまま火入れの際多大の時間をかける等、集約的労力をかけて焼却しなければならなかったのである。

この報告の終りに

白山麓では、焼畑用地を「ムツシ」とよぶのに対し、焼畑不利用地・不適地を「アラヤマ」・「ダケヤマ」・「ダケ」・「サンカ」・「キリ」等ばらつきが見られた。ムツシとサンカ・ダケヤマ等、両者の決定的な要素上の差は、ムツシは山地斜面上の下半部に位置することが判明した。

焼畑不利用地・不適地は、尾根筋や斜面上半部に位置するため、その特色の要約は次の通りである。

1. 山足の長い斜面、すなわち尾根筋と谷筋との標高差のある斜面の場合は、サンカ・ダケヤマはムツシに比較し、寒冷で積雪量が多く根雪期間も長く、農耕条件としては劣る。
2. 山足の長い斜面では、雨水・融雪水はサンカ・ダケヤマよりムツシへ下降するため、乾燥すると同時に、栄養分の流失が激しく痩せた土壌となる。因みに山足が短く、緩やかで低い里山は、焼畑には不向きである。
3. サンカ・ダケヤマは、乾燥し栄養分が少ないので、コナラ・ミズナラ等がタチキワラ・ダイボクワラを形成する。
4. ブナ・ミズナラの高木は、落葉が多い割に分解腐植量が少なく、半腐植のツツレワラ・ジャムネワラ形成し、焼畑の障害となっている。

サンカ・ダケヤマに対しムツシは、斜面下半部や斜面途中の平坦地に位置するため、その特色は次の通りである。

1. ムツシは、山足の長い斜面下半部に位置するため、気象条件が相対的に温暖で、積雪量が少なく根雪期間も短く、風当りも弱く、農耕条件としては優れている。
2. 山足の長い斜面では、雨水・融雪水はサンカ・ダケヤマよりムツシへ下降するため、ムツシは湿润であると同時に、栄養分が集積し肥えた土壌となる。
3. ムツシは湿润で、肥沃な土壌に恵まれ、マルバオバル（ミヤマカワラハンキ）、ウツギ（タニウツギ）・リョウボ（リョウブ）等がネゾレワラ・シノギワラを形成する。
4. 谷筋や凹地の水分過剰な場所はグライ化作用で、急なノマは雪崩滑落で、共に草地となり肥沃である。
5. マルバオバル・ウツギ等の葉は柔らかく、緑色のまま落葉する上、土壌も湿润なので分解腐植しやすく、腐植土が多く供給され肥えている。

今回の調査研究は、ムツシの環境条件として、海拔高度・傾斜・植生・地形・土質・ツツレワラ等を総合した伝承内容を、民俗学的手法を中心に、隣接する地理学・地形学・森林土壌学的視点も加え、

要素別に検証したものである。伝承内容は、焼畑民が幾世代にもわたる焼畑経験を通して蓄積した総合判断で、言葉をおきかえれば焼畑民が、焼畑のフィールドとしての“山”に対して抱く、鋭い生態学的洞察力そのものである。伝承内容は、結果的には科学的にも道理にかなっており、帰納的に集約された内容は、焼畑民独自の“山”への知恵である。

焼畑は、固定的な水田・常畑とは異り、毎年ムツシの森林原野を伐採し、新しい圃場を常に求めていく土地利用法である。そのため毎年毎年、異ったムツシと取組まねばならぬ焼畑民は、食糧を確保する生活の手段として、ムツシの良悪を判断する指標を、平野部稲作民・畑作民の生活感覚とは異質な伝承内容として、身につけていたのである。すなわち白山麓の焼畑民のムツシ選定基準や知識は、焼畑消滅期においても継続され、科学的に難のない内容であったのである。

「湿気が多い凹地や谷筋に草地ができる。」「ブナ林にツツレワラができる。」等の問題は、従来の既習の知識では理解できず、文献資料や石川県林業試験場長谷川義法氏の御指導等を通じて、自学自習を余儀なくさせられた。また、樹木の地方名から和名を判断するのも苦勞し、山口一男氏に多大の御指導を受けた。このように、専門外分野にも踏み込んで検討したので、的を射ない考察もあると思われるので、多方の御教示を戴きたいと思う。

浅学薄究の考察であるが、時代推移と手取川開発の陰で、消滅寸前の焼畑慣行の一側面を記録するという機能が幾分でも達成できれば、これに過ぎるものはないと思う。山間部に散在する出作りには、前もって調査時を連絡する方法もなく、突然訪問し調査を強行したり、宿泊を依頼して夜分の聞き取り調査をしたり、御迷惑をかけた方々を含め、調査に御協力いただいた関係者・伝承者は次の通りである。なお伝承者の中には、すでに故人となられた方々もあり、御冥福を祈るものである。

なお本論は、石川県白山自然保護センターの白山麓自然環境活用調査の内容一部を活用させていただいた。ここに厚く御礼を申しあげる次第である。

調査協力者氏名（敬称略、明治13年生は明13と略記し、最初の地名は白山麓居住地、次の地名は移転先を示した。愛宕富士（明39・白峰村大空）、愛宕とめ（大4・白峰村大空）、伊藤市平（明43・新丸村小原・小松市）、伊藤常次郎（大11・新丸村小原・加賀市）、加藤正信（明44・白峰村赤岩・鶴来町・故人）、加藤勇京（明29・白峰村赤岩・故人）、久司久四郎（明39・白峰村赤谷、金沢市、故人）、小田孝太（明44・尾口村東荒谷谷、鶴尾伝兵衛（明32・尾口村尾添・故人）道見謙助（明38・新丸村木地小屋・小松市・故人）、橋爪忠一（明32・新丸村苑立・小松市）、長谷川義法（昭9・石川県林業試験場）、長坂吉之助（明28・白峰村苛原・白峰）、永井竹雄（昭2・白峰村北俣・勝山市）、中間菊能（明44・新丸村杖・金沢市）、兵井庭一（明43・白峰村下田原・鶴来町・故人）、尾田フク（明39白峰村五十谷・堂の森）、尾田清正（昭6・白峰村五十谷・堂の森）、尾田敏春（昭16・白峰村五十谷・白峰）、尾田好雄（昭8・白峰村太田谷・白峰）・山内行雄（昭5 尾口村東二口）、山口一男（昭24・白峰村桑島）、山下石松（明37・白峰村白峰・故人）、山下松蔵（明43・白峰村白峰・故人）、山下五郎（明40・白峰村大道谷・故人）、山口清次（明37、白峰村赤谷・白峰）、山口清太郎（明36、白峰村下田原・金沢市）。

文 献

石川県白山自然保護センター (1988) 白山麓自然環境活用調査報告書, 石川県白山自然保護センター

石川県白山自然保護センター (1986) 白山の自然誌7 白山の出作り(執筆岩田憲二)

加藤助参 (1935) 白山山麓に於る出作りの研究, 京大農業経済論集第1輯, p.247~301京都大学

久保次郎 (1970) 白山の気象, 日本自然保護協会中部支部白山学術調査団編, 白山の自然, p. 51~109, 石川県

- 宮崎榊監修 (1961) 森林土壌の見分け方, 全国林業普及協会
野本寛一 (1987) 生態民俗学序説, 白水社
太田誠一 (1980) 焼畑と土壌, はくさん第8巻第2号, p. 5~8, 白山自然保護センター
大政正隆 (1978) 土の科学, 日本放送出版協会
里見信生編著 (1979) 北陸の自然誌山編, 巧玄出版
東京農工大学農学部林学科編 (1981) 林学実務必携, 朝倉書店
橘礼吉 (1987) ムツシの呼称とその意味—白山麓の焼畑用地の民俗的考察 その1 石川県白山自然保護センター研究報告第14集, p. 91~105
千葉徳爾 (1975) 白峰村の小地名—特に出作り地名について— 石川県自然保護センター研究報告第2集, p.143~144
山根一郎他 (1978) 図説日本の土壌, 朝倉書店
全国林業改良普及協会 (1958) 森林土壌の見分け方下巻, 全国林業改良普及協会

Summary

The Mt.Hakusan region was once a center of producing cereals by yakihata (slash and burning agriculture with shifting cultivation). In the mountain field, the forest and grassland which are suitable for yakihata are called "Mutsushi". All the mountain field can not be used for yakihata. Yakihata farmers choose their "Mutsushi" by the synthetic judgement of such nature conditions as the altitude, the configuration of ground, soil condition, vegetation and so on.

"Mutsushi" has following features:

1. "Mutsushi" is mainly found on the lower part of the long slope of mountains where it is warm, not so windy, and has less snow.
2. Rainwater and thawing snow flow down the long slope of mountains, so "Mutsushi" is both damp and fertile, which enables such shrubs as Taniutsugi, Ryobo and so on to grow gregariously.
3. "Mutsushi" is also found in inclined swampy valleys where frequent snowslides have prevented shrubs from growing but grasses grow. Although grassy "Mutsushi" is fertile, it is more difficult for farmers to burn the land because they must bring in firewood as fuel.